

石油精製，石油・石炭製品

ここでは、数のうえで圧倒的多数を占める石油精製業の会社史について紹介する。

日本における石油会社の嚆矢は、明治4（1871）年に設立された長野石炭油会社であるとされている。しかし、石油産業が形成された起点としては、やはり明治21年新潟県での有限責任日本石油会社の創立をあげるべきであろう。

『日本石油史』（昭和33年）は、日本石油株式会社の70年史という性格も兼ねているが、叙述の重点を業界史に置いている。日本の石油産業のあゆ

みを学ぼうとする者にとって、必読の書である。

個別企業の会社史という点では、東亜燃料工業の『15年史』（昭和31年）と『30年史』（昭和46年）が優れている。戦時統制下の設立事情、終戦後占領下の苦難、スタンダード・ヴァキュームとの提携の経緯などを詳細に記述している。また、時期はさかのぼるが、大正10(1921)年に日本石油と合併して消滅した宝田(ほうでん)石油の『25年史』（大正9年）も興味深い。明治から大正にかけて、国内石油会社の一方の雄の発展過程を、いきいきと描くことに成功している。

石油危機以後、従来に比べて充実した石油会社の会社史が刊行されるようになった。『昭和石油30年史』（昭和49年）、『富士石油の10年』（昭和50年）、九州石油の『操業15年史』（昭和55年）、『大協石油40年史』（昭和55年）、『三菱石油50年史』（昭和56年）などがそれである。このうち『大協石油40年史』は、有力民族系石油会社の初の本格的社史とすることができる。また『三菱石油50年史』は、昭和49年の水島製油所重油流出事故についても取り上げている。

民族系石油会社の雄であり、イランからの石油輸入、ソ連からの石油輸入、石油連盟脱退などの独特の経営行動を展開した出光興産は、まだ本格的な会社史を刊行していない。基本的には、民族系石油会社に分類することができる丸善石油の場合にも、同様のことが言える。ただし、出光興産については社史に代わるものとして、出光佐三の自伝にあたる『40年間を顧る』（昭和26年）、『我が45年間』（昭和31年）、『出光50年史』（昭和45年）がある。また丸善石油についても『油屋物語』（松村石油株式会社50年史、昭和33年）によって、創設者松村善蔵の足どりを知ることができる。

なお、石油鉱業に関しては『アラビア石油創立10周年記念誌』（昭和43年）、『帝石史 編纂資料』（草稿）その1～その3（帝国石油、昭和34～35年）、『石油資源開発株式会社10年史』（昭和42年）などがある。また、業界団体史としては『石油鉱業連盟20年のあゆみ』（昭和57年）がある。

（橘川武郎）